

槐

かい

岡井省二創刊

平成22年4月号



平成二十二年四月一日発行 第二巻第四号 通巻第三二六号 毎月一回 日栄社
平成二十二年五月十八日第三種郵便物認可

冬の虹

高橋将夫

選ばれて残されしもの冬の虫
沈黙を破るのはどの冬雲雀
公平に張りたる池の氷かな
闇汁の中身を知つてしまひたる

酔海鼠の齒ごたへほどの返事かな
省二思へば真空に冬の虹
連風の殿とくに揺れてをる
背のホックはづしてもらふ大石忌
春星や乙女の横に獅子がゐて
残雪の堅き晩節なりしかな
決断の時は春天仰ぐなり

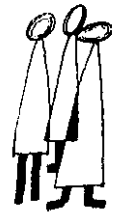
槐安集

水野恒彦

海嘯を遙かにしたる歌かるた
莫告藻や髪膚にひびく波の音
雲なべて沖より生まる手毬唄
切山淑いよよ澄みたる海の紺
ひととせはかりそめならぬ今年かな

延広禎一

発心の空に打ちたる宇宙独楽
神々のまぐはひ振りと蟒蛇と
不生不滅金平糖あるおらが春
人日や檻褸仕分けをる奪衣婆
賽の目は赤のゾロ目よ夢祝



加藤みき

龍眼をとり出してをり龍の玉
裸木にワルツの風の来てゐたり
鯨の尾と藤壺の舞ふ虚空かな
下萌の風の痛さよ海照つて
天界は役者揃ひぞ牡丹の芽

石脇みはる

立春大吉搗栗かちを口取に
テーブルにデージーの鉢置きにけり
大寒の熱にチーズホンデューかな
きなこ餅三つ食したる女正月
二ん月や布袋和尚の腹の内

中島陽華

風花や段駆け降りる緋の袴
つつしんで写経す鏡開きの日
餅花やオツコンオツコン子をあやし
角座出て足はなんばに三日かな
あかつきの卓の上なる寒桜

竹内悦子

鐘の音百をすぎたる初詣
不動明王読経の声も二日かな
うすらひを神の柄杓で割りにけり
三角に干されてありし懸大根
狼の毛の筆なりし寒見舞

栗栖恵通子

沖繩 五句
初春や王家朝賀の男帯
年あらたジンベイザメの立ちあがる
元旦の海鼠の肌にふれてゐる
深海のうつぼの群れも屠蘇心地
水を吸ふキコン幾万春を待つ

大島翠木

初雪をつけ戸袋へ送りけり
右から雪糝がつてお元日
大寒の十指に腹のありにけり
玄冬や深く沈みし鯉の上
立春大吉目高の水の真つ平

雨村敏子

元旦の満月深海の静寂
カルメンも阿國もつづく御慶かな
身の内にくれなぬの魂齒朶飾る
裸木となりて色もつ木立かな
水滴の亀の口より寒明くる

久津見風牛

雪だるま余命の影を長く引き
風花や落し穴あるかも知れず
くしやみする虎に気嫌を直しけり
人ぬなくそこらあたりをいたち畏
人間をしてゐる雪間の溝掃除

本多俊子

初明り椰千年の息づかひ
ダイヤモンドダスト神の息吹かな
凍鶴やラピスラズリの空が見ゆ
家持のうた聞こえくる寒の星
冬紅葉しづかに光る命の炎

近藤きくえ

玉砂利のふくふくと鳴る初御空
春を待つ如来の葉壺薄日さす
葛湯とくたちまち渦が糸がるる
鱸酒にのまれいよいよ恵比須顔
寒雀とび交ふ日向吾の影

近藤喜子

雪晴や寄せ書きしたくなる大地
白々と水仙すでに夜のこころ
口紅をひきそれからの雪をんな
内側より光さしくる寒椿
銀泥のこゑ凍鶴の洩らしけり

谷村幸子

一月や形見の杖の黒光り
初春の御手しなやか観世音
大王松通りすぎれば仏の座
元朝の満月白し宮の森
筆おいてぶらり出でたり福寿草

瀬川公馨

正月の雑歌なりけり鹿の群れ
松に来て群生化石無菌室
冬霞を枕にしたる大鴉
噎れ声の Rond Rond や冬紅葉
寒垢離や三葉虫の触角ぞ



槐市集

犬塚芳子

現れし寒鯉の緋の斑かな
庚寅のつしと雪のお元日
向きかへて雀御慶の雪散らす
冬耕や土の黒さのいきいきす
細首の寒水仙の底力

犬塚李里子

とある日の紫式部雪明り
大念珠油山寺繰る音のみの雪催ひ
鳴き龍に大脳びびる初社
粥柱齡しづかに受け入れむ
凍蜘蛛のするりと落ちし今際かな

井上静子

産土の除雪の轍またも雪
大年のソユーズの空晴れてをり
寒椿目差凜と阿修羅像
車椅子のゆつくり通る冬日差
自転する地球に生ひし冬董

吉田順子

日輪を恋ひ凍蝶の飛びあがる
寒椿五六歩なれど遠かりき
樫の紅にこころを集めたり
明け方の冬東雲の珊瑚いろ
山焼に乾坤の闇ゆるぎなく



槐集

高橋将夫選

かがり火の炎ひきよせ除夜の鐘
東京 西村 純太

涅槃てふまぼろしを視て冬の蝶
練獄にとどかざりしや霜のこゑ

寒三日月つひの啓示を放ちたる
あめつちを死霊のごとき冬の霧

世を捨てしものにはあらず寒蜩
岡崎 寺田すず江

思はねば何も見えざり海鼠囓む
魂を奪はれてゆく日向ぼこ

生も死も天に預けてごまめかな
寒の水濃きもも色の中の舌
羊水のごときぬくもり初日浴ぶ
枚方 富松 寛子

白妙に青き精霊七日粥
枯芝に至福の黙の流れけり

大寒や縦横無礙の鳥つぶて
ストローをのぼる重たき寒の水

尖つて渡りきし世や水温む
寝屋川 前田美恵子

人生は臍にをりぬ寿
宝船覚むるやすでにだまし船

風花の吸ひ込まれゆく時空かな
ことごとく翳りて早春のこだま

鱈買ふ巷の寒さまさりけり
大坂 久保東海司

菰の中火種が程の牡丹の芽
寒鯉の鱗ひとそよぎひと濁り

春田打ちつつおのが影鋤き込んで
水餅の水汲み替へて濁りなし
狐火の潜みし森もダムの底
守口 柳川 晋

神隠し伝はる谷に斧始
蓬菜や蒙古高句麗の鬼もゐて

北河内七市百村初戎
柁を挿す過越の夜のごとく

銀河往来 高橋将夫

◇「槐集」 観照

かがり火の炎ひきよせ除夜の鐘 西村 純太
除夜の鐘が鳴って、篝火の炎が闇の方へゆらぐ。まるで除夜の鐘に引き寄せられるかのように。幾多の煩惱もまた炎とともに引き寄せられるのであろうか。

思はねば何も見えざり海鼠囁む 寺田すず江
世の中はなかなか思い通りにいかない。しかし、思わなければ、何処へも行けない。思えば少なくともそこに近づく。掲句は理屈の句ではない。意思の句である。

白妙に青き精霊七日粥 富松 寛子
真っ白な粥の中に新鮮な七草が混じっている景。七草粥を見て「白妙に青き精霊」と詠んだ感性に脱帽。こんな七草粥の句に出会ったのは初めてである。美しい。

ことごとく翳りて早春のこだま 前田美恵子
日が翳って森羅万象が薄闇に沈んでゆく中を木霊が晴れやかに返ってくる景。日が翳っても、早春のこだまなのである。翳りの中に光が見えてくる。

寒鯉の鱗ひとそよぎひと濁り 久保東海司
水底でじっと動かない寒鯉。そんな寒鯉の鱗が少し動いた。そ

して、その周りがわずかに濁ったという景。「ひとそよぎひと濁り」の表現が実に巧み。

北河内 七市 百村 初戎 柳川 晋
漢字ばかりの句だが、内容は実に簡明で、めでたいの一語。北河内の七市百村が初戎だという。

泣きおうて慰めおうて初笑ひ 竹中 一花
具体的に何と言わなくても、人間生きている限り、悩みはいくらでもある。そして人間だからこそ共に泣き、慰めあうわけだが、最後は笑いあいたいものだ。

きのふけふみかへる阿弥陀去年今年 中野 京子
京都・禅林寺（永観堂）のみかえり阿弥陀は、その名の通り後ろを振り返っておられる。なるほど、昨日をそして過ぎ去った年月を振り返っておられるのだろう。

積る雪黄泉にゆくには明るすぎ 大山 里
雪が積もると、あたりは明るい。雪明りである。果てしない雪野を行くと黄泉の世界に迷い込みそうだが、黄泉に行くには明るすぎ。このあたりで戻った方がよさそう。

はすかひに貴人畳に春日さす 近藤 紀子
貴人畳は正式には四畳半の茶室の床前の畳。広間でも高貴な人が坐る畳に使う。そんな畳に日が斜めに差し込んでいる景。
(以下略)